

放送日： 平成 20 年 6 月 16 日

タイトル： 顎の変形とその治療

担当者： 医師 角熊 雅彦

公立甲賀病院歯科口腔外科の角熊でございます。今日はあごの変形とその治療についてお話しします。

顔やあごの骨格に由来する受け口、出っ歯、あごの歪み、口元の歪みなどの症状を持つ患者さんは顎変形症と呼ばれ、特に思春期の頃からこれらの症状が顕著になります。審美的な障害のみならず、噛み、食べるというヒトの本能に属する機能を傷害することが多いにもかかわらず、以前は治療がなおざりにされてきたようです。これらの障害に対して、10 数年前から全国の多くの大学病院や病院歯科口腔外科などの医療施設で、手術と歯の矯正治療を組み合わせ、外科的矯正法が安全かつ精密に行われるようになり、また、最近では健康保険の治療の枠組みの中にも組み込まれるようになりました。

さて、顎変形症とはどんなものかといいますと、うわあごの骨またはしたあごの骨あるいはそれら両者の大きさや、形、位置などの異常、うわあごとしたあごとの関係の異常によってあごや顔面の形の異常と噛み合わせの異常を来たいして美的不調和を示す疾患と定義されています。

その中には、先天性顎変形症、顎発育異常および後天性顎変形症などがあります。先天性の顎変形症は生まれた時すでに顎や顔面に変形が出現しているものです。あごの発育異常にはうわあごが前突したり、後退しているもの、したあごが前突したり、後退しているもの、したあごが非対称なもの、上下のあごともに前突しているものや口が閉じないものなどがあります。後天性の顎変形症はあごや顔面の外傷、炎症、腫瘍その他の疾患およびその治療後に残った変形などがあります。

治療は、顔の変形と不正な噛み合わせに対して顔の審美性と噛み合わせの両面を修正するため、手術の前に、手術によって移動するあごの状態を予測して歯が植わっている骨の範囲内で歯を移動させる歯の矯正治療を矯正歯科医が、次いで入院下での顎矯正手術によるあごの移動と新しい噛み合わせの決定および審美的な顔の修正を口腔外科医が、さらに手術後の噛み合わせの微調整を矯正歯科医が共同して行っています。

美容外科や美容整形治療との大きな違いは前者が形態、すなわち見かけを重視し、機能は二の次にしているのに対して後者すなわち外科的矯正治療は、顔面の形態あるいは審美性と噛み合わせの機能の両面を重視している点であります。実際に食物が噛み砕かれた後の大きさの測定から咀嚼機能を評価した実験でも噛み砕く能率は手術まえの 4 倍に増加していました。このように形態と機能の両面を重視した治療が顎変形症治療の原則です。

治療時期はあごの発育異常の例をとると成長の二次スパークが終了し、身長が増加が止まった時期から手術前の矯正治療を開始します。この矯正治療は通常 1 年から 2 年必要です。一般的に女性は 17~18 歳以降、男性はこれより少し遅く 18~20 歳以降に行います。

手術は原則として全身麻酔で行います。入院期間は約 2 週間です。輸血はしたあごの骨あるいはうわあごの骨単独の手術であれば必要ありません。口のなかで手術をしますので一般的には顔に傷はつきません。また、手術後約 2 週間、傷口の安静のために口を開かなくします。その間の食事は、口の中から口が開くようになる手術後 3 週間くらいまで流動食を摂っていただきます。手術後顔面が少し腫れますが、軽微です。手術後の合併症は主として下唇とオトガイ部に一時的な知覚の異常が発現することがありますが、1 年以内にほとんどが消失します。

以上、顎変形症とその治療についてお話ししました。